

サポクラ 通信

令和4年(2022年)4月号

今月の内容は...

- ・春、一年の始まり1
- ・レッサーパンダの指4
- ・今の鳥たちの近況報告6
- ・「とわ」の冬9

春、一年の始まり

さっぽろ円山動物園サポートクラブサポーターの皆様、はじめまして、飼育展示一担当係長の坪松（つぼまつ）と申します。飼育展示一担当は、カンガルー館、こども動物園、ゾウ舎、サル山、アジアゾーンの高山館、寒帯館、アフリカゾーンのカバ・ライオン館が担当です。飼育員の動物に関する情報を心待ちにしていた方には、申し訳ございませんが、今年度初回は、私から普段、皆様をおもてなしするために、私たち職員がどんな仕事を行っているかを知ってもらおうと、休園期間の作業を中心にご紹介させていただきます。

●施設点検

施設の状況を見て回ります。今年は、雪が多かったため、看板やサインに交換が必要なものが多々見られました。



●ボロ出し

獣舎にたまった不要なものを整理します。

子ども動物園では、古くなった柵や施設入口の砂落としマットを撤去しました。

併せて、少しずつ整備を行っています。

●動物の移動（引っ越し）



閉園期間は、動物の観察時間を長く確保ができます。

以前、紹介したプレーリードッグ（メス）の新しい獣舎が完成したので、移動しました。移動後は、さっそく隅々まで探索していました。



●園内整備

鳥インフルエンザ対策として、猛禽舎に新しい網張りをしています。また、土入れなど重機を使用した大がかりな作業も休園期間に行うことが多いです。



休園期間は、普段できない作業を職員が力を合わせて行っています。動物たちの生き生きした姿を伝えるのはもちろんですが、来園者の皆様が動物園で楽しい時間を過ごしていただくことを思い、職員は業務にあたっています。



GW明け「モルモットのふれあい教室」を再開します！



「要チェックや！」

新型コロナウイルスの影響で、長らく中止していた「モルモットのふれあい教室」を、ゴールデンウィーク明けから再開いたします。

先日、ボランティアの学生に協力してもらいリハーサルを行いました。子どもだけでなく、皆さんからの要望も多かったので、職員も楽しみにしています。

詳細は、ホームページ等でご連絡いたしますのでご確認ください。

モルモットは愛がん動物（ペット）であるからこそ、皆さんとふれあい、その温もりを通じて、命の大切さを教えてくれます。

実施にあたっては、モルモットの動物福祉に十分に配慮してまいります。



作成 飼育展示一担当係長 坪松

レッサーパンダの指

円山動物園サポートクラブのみなさま、いつもありがとうございます。レッサーパンダとヒマラヤグマを担当している大野です。今回はレッサーパンダの指についてのお話です。

第六の指

レッサーパンダが餌を食べる様子を観察してみると、他の動物との違いがわかります。実は食肉目に分類されているレッサーパンダなのですが、ササを食べる際には前肢でササの枝をつかみ、口元にたぐり寄せて食べている姿が見られるかと思います。このようにレッサーパンダは食肉目の中でも前肢を上手につかい、物をつかむという複雑な機能をもつ数少ない動物なのです。



ではなぜ物をつかむことができるのでしょうか？

それが第六の指とも言われる、撓側種子骨(とうそくしゅしこつ)が発達しているからなのです。骨格標本を作製したので見てみると、赤丸の中がそれにあたります。



他の指のように関節があるわけではないのですが、この骨を支えとして物をつかむことが出来るのです。

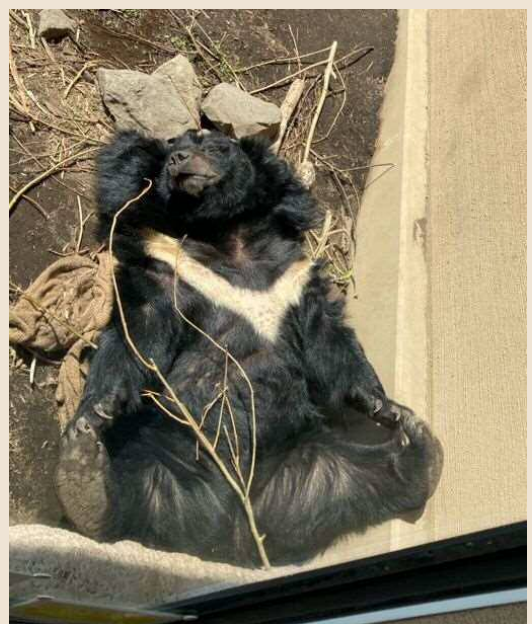


ついでに足裏を見てみると足に肉球がなく、毛がびっしりと生えているのがわかります。これは寒冷地の樹上で生活するための適応なのかもしれません。



ヒマラヤグマ

最近、トモがお気に入りの寝る場所に熊棚をイメージし、枝を入れてみました。昨年も入れていたのですが、短めだったので全く使われなかったため、今回は少し長めのものを用意したところ、下に敷いたり、お腹に乗っけたりしていたようです。より、居心地が良くなるようにこれからも頑張ります。



今の鳥たちの近況報告

さっぽろ円山動物園サポートクラブサポーターの皆様、初めまして。昨年12月から3班に配属になり、この4月から熱帯鳥類館を担当することになりました、高橋と申します。

【新年度最初のお便りは熱帯鳥類館から】

現在、熱帯鳥類館は閉館しています。

一部獣舎の閉館や鳥類ケージにネットを張っている理由は、札幌市内で高病原性鳥インフルエンザが発生したためです。

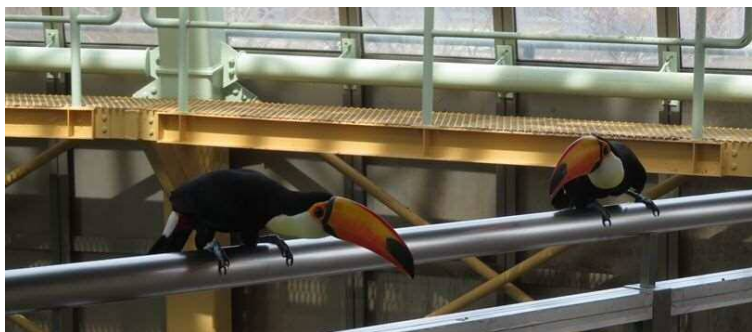
動物園から10キロ圏内で見つかったハシブトガラスの死骸からも検出されており、園内にもハシブトガラスが生息しているため、かなり警戒している状況です。

【高病原性鳥インフルエンザとは？】

A型インフルエンザウイルスの感染による鳥の疾病で、ニワトリに感染させた場合に、高率に死亡させてしまうようなものを高病原性鳥インフルエンザといいます。感染力も強く、数百羽の死亡が確認された養鶏場もあるようです。

また、今回札幌市で見つかったキツネやタヌキの死骸から、哺乳類としては国内で初めて高病原性鳥インフルエンザウイルスが検出されました。

円山動物園では飼育する動物に感染させないため、守るためにできる限りの対策を施しております。鳥類の観覧を楽しみにしている皆様には大変ご迷惑をおかけしておりますが、ご理解の程お願いいたします。もうしばらく、鳥類が見られなく、また見づらくなっているかと思いますが、ご協力をお願いいたします。



オニオオハシ

※現在、熱帯鳥類館は閉館しておりますが、鳥類は元気に過ごしています。

ノドグロコウカンチョウ



セイキムクドリ



オオジシギ



サトウチョウ



インドクジャク

【今後に向けての準備】

札幌にも春が近づいていますね。春は多くの動物の繁殖期。熱帯鳥類館のフラミンゴにも繁殖期がやってきます。野生のフラミンゴはバケツをひっくり返したような巣を作ります。動物園でもフラミンゴがすぐに繁殖に取り掛かれるよう、職員が基になる巣台をひとつずつ作成しています。

当園のフラミンゴの場合、例年、屋外放飼場で繁殖を行っていましたが、高病原性鳥インフルエンザの発生により、屋外に出せず、繁殖に取り組めない状態となっています。流行が収まり次第、屋外で放飼する予定ですが、それも繁殖期終盤。遅れると一年先延ばしになってしまいます。

動物園では10年20年先を考えて飼育をしなければ、世代をつなげることが難しくなります。現在行っている対策と並行して進めていく必要があります、前もって準備することが大切です。



←ベニイロフラミンゴ（体色の赤みが強い）
チリーフラミンゴ（嘴が半分以上黒い）



左の写真は、プールと地面の傾斜を少なくするために、スコップで掘り返しているところ。

右の写真は、バケツで土を練って巣の基を作っているところ。

開館したときに鳥類の元気な姿を見せられるよう、ヒナの姿をお見せできるよう、全力で飼育していくとともに、繁殖に向けての準備も進めていきたいと思えます。

「とわ」の冬

サポートクラブの皆さま、いつもご支援ありがとうございます。
4月からヒグマ・オオカミ・チンパンジーの担当になりました、小林です。
今回は、いつもと違った冬を過ごしたヒグマの「とわ」についてお話ししたいと思います。



【ヒグマの冬眠】

野生下のヒグマは、冬になると穴を掘って冬眠を始めます。だいたい12月から3月下旬頃まで、穴の中で一切の飲食をせずにウトウトしながら過ごします。冬眠する一番の理由は食べるものがなくなること、秋にたくさん食いだめをして体脂肪を蓄え、冬眠に備えます。

【今までの「とわ」】

飼育下では真冬でも十分な食料を得られるので、当園のヒグマは今まで冬眠しないで冬を過ごしていました。とは言っても、メスの「とわ」は毎年、穴を掘ったり、枝葉を洞穴スペースに運びこんだりと、冬眠に向けた行動がみられていて、オスと比べて活動量が減って休息する時間も多くなっていました。



【今年の「とわ」】

12月

今年も今までどおり、枝葉を運ぶ様子や休息時間の増加がみられていました。
しかし、枝葉だけではなく雪や土を洞穴スペースに運び入れてそこで寝ていることが多くなり、さらには、展示場に出るときになかなか出ていかなかったり、収容しようとしても帰ってこなかったりと、こちらの呼びかけに対してあまり反応しなくなりました。



1月中旬

普段「とわ」が使っている寢室には、「産室」と呼んでいる小さな部屋が隣接しています。冬眠穴の代わりとして利用するのではないかと思い、これまで（少なくとも私が担当していた2年間）開けたことのなかった産室を開放して自由に入出入りできるようにしました。床材として乾草を大量に入れたところ、寢床を作って産室の中で寝るようになりました。産室を開放して1週間程度すると屋外に出るのを嫌がるようになり、1日のほとんどを産室で過ごすようになりました。この頃から、徐々に採食量も減り始め、食べるのに時間がかかるようになり、食べる量が少なくなったからか、排泄も1日1回と少なくなりました。



産室



ほぼ毎日、寢床を作り直していました



2月上旬

2月に入ると、寢室に近づいて声をかけると産室から出てくるのですが、一瞬だけ顔を出してすぐに産室に戻ることが多くなりました。食べものも小さく切らないと食べなくなり、最終的には給餌しても産室から出てくることなく眠り続けるようになりました。1日1回は顔を出してくれたのですが、その他の様子は産室に設置したカメラの映像から確認していました。産室の中では基本的にずっと寝ていたのですが、予想していたよりも寝返りが多く、生存確認がしやすかったのは助かりました。採食は2~3日に1回、食べものに対する反応があったときにリンゴやオレンジ、ブドウ等を小さく切って与えていました。この頃には、排尿は1日1回（かなり大量でした）、排便2~3日に1回、長いときは1週間に1回程度まで減少しました。



～寝相いろいろ～

3月

3月に入ると、作業のたびに産室から出てくるようになり、少しずつではありますが反応が良くなってきました。気温も上がってきてそろそろ外は春の気配も感じる頃、ということで、屋外に出る扉を開放して、少しずつ外の空気に触れる時間を作ることにしました。最初は産室からも出てきませんでしたが、おそるおそる扉に近づくようになり、屋外の匂いを嗅ぐようになり、顔を出すようになり、上半身を出すようになり、と少しずつ屋外の環境に慣れていきました。この頃から少しずつ食欲もあがってきて、果実や葉物等、水分の多いものを好んでかなりゆっくりではありましたが食べ始めました。そうになると、排便も1日1回になり、量もこれまでより多く出るようになりました。



初めて屋外に顔を出した日

警戒しているのか、後足は絶対に寝室に残したままでした



ほんとに少しずつ食べています

4月

4月に入ってすぐ、自分から屋外に出るようになりました。初日は30秒ほどですぐ寝室に戻って来ていましたが、その後、雪に体を擦りつけたり、いろいろな場所の匂いを嗅いだりと、久しぶりの屋外を楽しんでくれるようになりました。今(4/15現在)では、アクリルガラスや檻越しにお客様の様子をじっと見つめたり、時にはお客様の動きに合わせて展示場内を走り回ってみたり、お腹を出して寝ていたり、春を満喫しているようです。食べるスピードもだんだん速くなり、食欲もますます上がってきています。すっかり昨年までと同じ様子ですが、相変わらず産室の中で良く寝ています。



【なぜ今年はいつもと違ったのか】

はっきりとした要因はわかりませんが、秋の給餌量が例年よりも多かったこと、それに合わせて体重が急激に増加したことが関係しているのではないかと考えています。まだまだヒグマの冬眠についてはわかっていないこともたくさんあるので、ヒグマの特徴的な冬の過ごし方が少しでも明らかになるようなデータを集められたらと思います。さらには、いつか皆さまに冬眠中のヒグマをお見せできるように、必要なことを考えていきたいと思っています。



最近では、オスもメスも採食後にまったりと寝ていることが多くなりました。この時期にはよく見られますが、他の季節ではなかなか見ることができません。ぜひ、今だから見ることができるヒグマを見に来ていただければと思います。